

氏 名 石川 肇

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大乙第236号

学位授与の日付 平成27年3月24日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 舟橋聖一論 — 「抵抗の文学」を問い直す

論文審査委員 主 査 教授 細川 周平
教授 劉 建輝
准教授 荒木 浩
名誉教授 鈴木 貞美 総合研究大学院大学
教授 藤井 淑禎 立教大学

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

本研究は、昭和戦前期に知識人の行動主義を唱えて「ダイヴィング」(昭9)を発表、戦後においてはNHK大河ドラマの第一作目となった「花の生涯」(昭27~28)などを執筆、丹羽文雄・石川達三とともに「戦後の流行作家三羽ガラス」と呼ばれた舟橋聖一が、戦時期に『悉皆屋康吉』(昭20)のような「抵抗の文学」と評される作品をいかにして書き、発表できたのかを、彼独自の「芸術至上主義」を基軸とし、それを体制迎合と抵抗の組み合わせとして、その思想の内実に踏み込んで分析する。具体的には、同時代の状況と舟橋の「芸術至上主義」とを照らし合わせながら、戦前・戦中期の舟橋作品の文学史的価値を解明し、「芸術的抵抗」の一典型とされてきた『悉皆屋康吉』に全面的な再検討を加え、戦時下「抵抗の文学」の意味をあらためて問い直す。

第一章 舟橋聖一の境涯と「芸術至上主義」の源

舟橋の「芸術至上主義」の源となる高等学校時代の戯曲を見ていく。舟橋の「芸術至上主義」による萌芽的作品であり、自身で処女作と位置づける戯曲「佝僂の乞食」は、たとえ仲間に見捨てられても自己の信念を曲げず、生涯戦い続けることを誓う主人公の「抵抗宣言」で幕を閉じるが、そこにはプロレタリア文学全盛期、および行動主義文学論争勃発時における左翼からの猛攻撃に堪え、戦時色に抗いながら庶民の生活の美をマネージメントする「悉皆屋」を主人公に据えた作品を書き進め、自己の「芸術至上主義」を押し通した源があるといってもよいだろう。それは、足尾銅山にかかわる家系に連なり、世間の目に耐えて生き抜かなければならない境遇が育てたものであると同時に、関東大震災ののち、秋田雨雀から受けた教えがしみ込んだものと考えられる。

第二章 心座時代—芸術的姿勢の形成

舟橋の所属していた心座と蝙蝠座といった小劇団から、近代劇運動としての新劇の芸術的役割を捉えなおす。新劇史の第三期を興した築地小劇場を組織していた小山内薫がキーパーソンとなり、歌舞伎役者の河原崎長十郎、前衛美術集団「マヴォ」の村山知義、そして小説「望郷」でデビューした池谷信三郎および東京帝国大学文芸部『朱門』同人を中心とし、劇団心座が結成された。舟橋はそこにおいて劇作家・演出家として活躍する。しかし、築地小劇場の分裂の歴史と相重なるように、芸術派とプロレタリア派の双方が交じりあった心座も、分裂して左翼劇団へと変貌していく。そのため舟橋は自己の「芸術至上主義」を押し通して退団するが、その半年後に劇団蝙蝠座を結成する。それは私淑していた亡き小山内の目指した国劇とは違ってはいたが、舟橋が彼から学びそして理解した新劇のもう一つの可能性であり、近代劇運動としての第四期を目指したものであった。

第三章 「外地」体験—転機の訪れ

舟橋の「外地」体験と、それに基づいて書かれた作品について考察していく。「戦後の流行作家三羽ガラス」のうち、丹羽文雄は、戦時中は海軍の報道班員として第一次ソロモン海戦に従軍、その見聞を「海戦」(昭17)にまとめ、石川達三は、南京大虐殺に関与したといわれる第16師団33連隊に取材し、その結果を「生きてある兵隊」(昭13)にまとめ、それぞれ「外地」との関係も深い。だが、舟橋には従軍体験がないため、これまで「外地」とまったく結び付けられてこなかった。しかしながら、戦後の自筆年譜の昭和4年8月には〈約四ヵ月、大連、奉天、京城に旅行した〉と記されており、その旅行ののち、小品二

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

作「ゴルフと天麩羅」「殖民地の礼儀」が残されていた。それら二作品を、舟橋が旅行から持ち帰ったパンフレット類、および舟橋の遺した「舟橋戦前・戦中日記」の当該部分を参照しながら読むことにより、日本人による中国大陸 - 朝鮮 - 日本をめぐる昭和初期の旅の様子や人間模様を浮かび上がらせつつ、彼の芸術には「外地」理解も含まれていたことを理解する。

第四章 行動主義から国策文学へ

「行動主義」から「能動的な民族主義」へ、そして「大東亜共栄圏」へと継続していく舟橋の思想に、彼の「芸術至上主義」が一貫として流れていることを確認する。昭和9年から10年にかけて舟橋聖一、小松清、青野季吉らが知識人の積極的な姿勢となる行動主義・能動精神の必要性を唱えた。この運動は文学者が積極的に社会に働きかけるといふくらいの意味で、その内容は各自によってまちまちだったこともあり、機関誌的役割を担っていた『行動』が昭和10年9月に経済的理由で廃刊になると、やがて運動は終息へ向かった。しかし、昭和13年ごろから舟橋は、かつての行動主義・能動精神を民族または国家発展のラインに沿わせた「能動的な民族主義」を唱えた。その一つの表れが日本文化の国際性をアピールした菊池寛編集『Japan To-day』への執筆であった。そして昭和15年に日本が「大東亜共栄圏」を唱えると、日本が〈大東亜の盟主〉となって「大東亜共栄圏」の理想を実現すべきでという形で思想を継続させ、国策文学「男」を書くことになる。

第五章 『悉皆屋康吉』—時代相の変遷を追う

『悉皆屋康吉』が舟橋の「芸術至上主義」に適った作品であり、万葉集や源氏物語や方丈記のように、日本の伝統文化や精神が作り上げた「国文芸」に連なっていくものだったことを、作品の梗概と表現の特徴に言及しながら論証していく。終戦三か月前となる昭和20年5月20日、戦火を免れた『悉皆屋康吉』千部が刊行された。関東大震災前後から2・26事件に至るまでの間、変容していく日本のなかで失われつつある伝統文化と、それを守りつつも発展させていこうとする日本精神を、舟橋は戦時下日本の方針に沿いながら、時流に媚びない芸術家を主人公として描き出していた。

第六章 結論—「抵抗の文学」を問い直す

舟橋のもっていた「生活の芸術化」思想や「民族優強」思想を分析し、その思想と作品との差異を見出すことから、戦時下「抵抗の文学」の意味を問い直し、序章で立てた問いに対する答えとする。芸術至上主義とは、19世紀初頭のフランスで用いられた標語「芸術のための芸術」にはじまるが、一種の美学を貫く舟橋の思想にも当てはまる。『悉皆屋康吉』には〈俺は職人じゃねえんだぞ、へん——芸術家なんだぜ——知らねエだろう〉という主人公康吉の自覚があり、これにはイギリスのウィリアム・モリスが中世の職人のギルドとその工芸の世界を理想とし、その復興を唱えた「生活の芸術化」が反映されていると考えてよい。そして2・26事件に象徴される〈一黒点〉に対し、この「生活の芸術化」で立ち向かうという図式が物語の一つの焦点となっていく。

補論 舟橋と「大東亜文学共栄圏」

実質的には日本占領期といってもよい上海における中国文学者たちの実態を、日本と中国との〈文学の交流〉を深める目的でつくられた『現代日本小説選集』第一集・第二集収録作品の日本語初出を検討することによって明らかにする。舟橋は、〈大東亜の盟主〉としてふさわしい〈日本的自覚に立ち、日本文化の伝統に根ざし、これを、欧米から解放された全アジア民族の歓喜と光栄によつて、豊かに肉付けを加へた〉ような強い文学を希求するなど、「大東亜戦争」に賛同する立場を表明していた。そして第一回および第二回大東

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

亜文学者大会に参加し、上海代表の章克標から中国語訳『現代日本小説選集』第一集を受け取る。この『現代日本小説選集』は第一集と第二集を合わせると、日本人作家 20 人による 25 作品が収録されており、〈一時代を切り取ったアンソロジーとしても興味深いもの〉になっていた。

博士論文の審査結果の要旨
Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は戦後流行文学の担い手として一時期もてはやされながら、研究者から忘れられた観のある作家に関する最初の本格的な論考で、舟橋聖一（1904～1976）の評伝と代表作『悉皆屋康吉』（1945）の詳細な読解というふたつの側面を持つ。遺族と接触して貴重かつ膨大な資料を収集した著者の地道な作業の結果として高く評価できる。数百項目に達する付録「舟橋聖一作品発表年表」は圧巻と評価できる。

序章「本研究の意義と方法」は舟橋評論の蓄積を野口富士男の「耽美主義者」と平野謙の「抵抗の文学」の二人の見解に集約させ、『悉皆屋康吉』評価がこのふたつの選択肢の間で揺れてきた経緯を論じている。そのうえで舟橋の生涯を詳しい系図、貴重な写真、家族の回想を交えて振り返っている。第一章「舟橋聖一の境涯と『芸術至上主義』の源」は著者の舟橋評価の根底にある「芸術至上主義」が初期作品「佝僂の乞食」（1924）に早くも見られると主張し、この作品にひそむ自伝的な要素や遺書との関連を述べる。第二章「心座時代—芸術的姿勢の形成」は二十代のときに所属していた劇団心座と劇団蝙蝠座を新劇史のなかで位置づけ、舟橋の芸術至上主義が特に心座の脚本にいかにも表現されたのかを検討している。第三章『『外地』体験—転機の訪れ』は彼の「満洲」・朝鮮旅行の後に書かれた関連作品「ゴルフと天麩羅」（1930）、「殖民地の礼儀」（1930）を遺品から発見された旅のパンフレット類や日記を参照しながら分析し、実際の出来事のフィクション化と、作家にとっての外地経験の重要性を検証している。

第四章「行動主義から国策文学へ」は彼の行動主義の提唱から国策文学にいたるまでの内実を考察する。昭和十年代に力を得た思潮であった行動主義には、一見それと離反するような民族優強思想や大東亜共栄圏と適応する側面があり、それは舟橋の芸術至上主義と合致した。このことを日本文化の国際性をアピールした英文評論「徳田秋声」（1938）、国策文学「男」（1942）の分析から証明している。第五章「『悉皆屋康吉』—時代相の変遷を追う」は呉服業界の一種の便利屋である悉皆屋を主人公に老舗の破産や計略結婚の企て、独立などを描いた長編小説が、戦時下日本の方針に沿いながらも時流に媚びない芸術家を描き、『万葉集』にさかのぼる「国文芸」を目指していた点を明らかにしている。そして明治以来続く「芸術家小説」の系譜に属することを指摘した。第六章「結論—『抵抗の文学』を問い直す」は前章の読解をもとに、『悉皆屋康吉』を「抵抗の文学」と見る平野謙の説を否定し、初期より貫かれている芸術至上主義の作品であると評価する。具体的にはウィリアム・モリスに由来する「生活の芸術化思想」や時代の国粹主義に発する民族優強思想を本作から浮かび上がらせている。

補論「舟橋聖一と『大東亜文学共栄圏』」では1943—44年に占領下上海で出版された『現代日本小説選集』第一・二集に中国語翻訳された「木石」（1938）、「枝木」（1939）の刊行経緯と選集内での位置を述べたうえで、選集の意義を「文学共栄圏の確立」に関する協力と抵抗の二面性と結論する。このように通俗作家として軽視されていた舟橋の戦前の軌跡を詳細に検討し、その帰着点として『悉皆屋康吉』を扱っている。

評伝と作家論の両立という野心的な試みであったが、若干の難点も否定できないと審査委員会では意見が出された。評伝としては終戦で中断されるのは惜しく、作品論としては野口と平野以外のエッセイに対する考察に乏しい。同時代の政治・文壇状況、特に抵抗の文学、行動主義、国策文学の議論に踏み込む必要性も指摘された。ただしそれは一次資料

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

を掘り起こした申請者の業績を損ねるものではない。将来の課題として、むしろ今後の展開が期待される部分でもある。論文審査委員会は、本論文を独創的な業績と認め、全員一致で本論文を博士の学位に相当すると判定した。